HAKOBI NEWS VOL.1

洋の東西が交錯した歴史を持つ街［はこだて］の美術館から
今、新たな時代へ向けてメッセージや情報をお届けいたします。

EXHIBITION PREVIEW 特別展のごあんない

伊万里「色絵人物牡丹文壺」江戸時代前期

八王子にある東京富士美術館は、兄弟館である静岡の富士美術館とともに日本美術のすぐれたコレクションを所蔵していることで知られています。今回の企画は、その中から選ばれた桃山時代から近代にいたる日本美術のさまざまなジャンル、すなわち日本画から浮世絵、書、漆器、陶磁器、刀剣・甲冑など約70点により、日本美術の真髄を紹介しようというものです。しばし、500年前の古に遡り、初夏の一時を先人たちが育んできた文化的な結晶に囲まれて過ごすのも一興でしょう。

天下人の造形「桃山の美術」

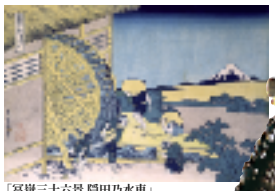
戦国の群雄割拠から抜け出し覇権を確立した織田信長と豊臣秀吉が政権を握っていた時代を、美術史の上では桃山時代といいます。わずか半世紀にも満たない短い期間でしたが、二人を頂点としたこの時代の美術は、かつてないほどエネルギッシュな造形意欲に満ち、豪華な風格と、のびのびとした日本美の特色を発揮しています。その代表格は、何と言っても天下人や諸大名の居所であった壮大な城郭であり、その内部を飾った壮麗な障壁画、襖絵、屏風絵などの絵画でしょう。

信長・秀吉に重用され、長年にわたり、御用絵師として一大勢力をなしたのは狩野永徳をはじめとする狩野派でした。この一派は漢画風の写実的で力強い画風に大和絵の描き方を取り入れ、壮大で華麗な作品を生みだしています。この他にも宮廷に仕えた土佐派や狩野派のライバルとして豪腕をふるった海北友松、長谷川等伯などの名も忘れることはできません。

軽妙洒脱「江戸の美術」

江戸時代の安定した封建体制を背景に、江戸庶民芸術の華とも呼べる浮世絵が発展します。吉原遊里や歌舞伎の舞台を主題とした菱川師宣の墨一色による簡素な木版画に始まり、美人画の喜多川歌麿や役者絵の東州斎写楽などで一つの頂点を迎えました。その後急速に衰退しますが、新しい風景画の分野を開拓した葛飾北斎と歌川広重が再び新風を巻き起こします。北斎は、江戸庶民が日夜親しんでいた風景を大胆な構図と極端なデフォルメで捉え、一方で広重は、日本風景の独特の興趣を、美しく優しく情味豊かに描き出しました。

この展覧会では、こうした浮世絵の他に、漆工品の硯箱・印籠や伊万里の陶磁器なども出品されますが、とりわけ甲や甲冑、刀剣などの精緻な美しさにも目を惹かれます。


「冨嶽三十六景 隠田乃水車」葛飾北斎 天保2-4年

「名所江戸百景 亀戸梅屋舗」歌川広重 安政3年

「切付小札縅側胴御納戸」緑威具足 藤堂家所用」江戸時代後期

日本の美とこころ

東京富士美術館所蔵
桃山から近代・絢爛たる500年の粋

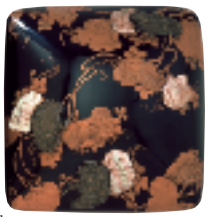
6月5日(火)～
7月22日(日)

西洋化の波「近代の美術」

江戸時代の300年にわたる鎖国を解いた明治維新により、日本全体が文明開化の風潮に覆われます。明治以降の美術も、西洋美術の様式や手法をそのまま導入し習得しようとする傾向が急速に台頭しますが、これに対し、それまで育んできた伝統的な美術を西洋の刺激のもとに脱皮させ、新しく展開させようとする動きも有力な支持を得ていきます。

この中心になったのがフェノロサや岡倉天心、橋本雅邦らが創立した日本美術院です。そこから、菱田春草や横山大観などの東洋的理想主義ともいうべき新たな日本画が誕生することになるのです。以上、各時代の特色の一部を駆け足で見てきましたが、会場ではさらに多様な広がりをご覧いただけます。ご期待下さい。（学芸課長 柴 勤）

「春秋草花図屏風」伝 俵屋宗達 江戸時代前期


「夕顔蒔絵螺鈿硯箱」 江戸時代中期・後期

COLUMN 兜—武士のファッション

鎌倉時代以降に台頭してきた武士たちの装いの道具は、戦における一生の晴れ着としての役割を担って、その財力や好みに応じながらも工芸技術の粋がつくされてきました。繊細な美よりも勇ましく気高くという意匠の大胆さが求められたそうした武士のいでたちの中でも、とくに兜は象徴的な存在でした。安土桃山時代に興った変わり兜の流行とともに、刀や矢から頭を守るためという実用的な意義よりも、集団の中で遠くから敵味方を瞬時に区別するために徐々にデザインの奇抜さが重視されるようになったのです。魚尾形兜、水牛形兜、狐形兜という代表的なかたちの他に、徳川家康の大黒頭巾形や、上杉謙信の三宝荒神形、加藤清正の長烏帽子形など個人のトレードマークとしても多くのヴァリエーションが生み出されました。和紙でつくった張り子を漆で固めて鉄鉢に接続する「張りかけ」とよばれる技法によって可能になったこうしたデザインの多様性は、宗教性や様々な動植物、物語などの見立て・虚構性を盛り込みつつ発展してきました。生死を賭けて武勇を神に捧げる戦の場は、もうひとつの祭、武士たちのとってのハレ（非日常）の舞台でもあったのです。（TH）

「鉄錆地六十二間筋兜」 桃山時代

EXHIBITION PREVIEW | EXHIBITION REVIEW | EDUCATIONAL PROGRUM REPORT | ART HISTORY | ESSAY ON MUSEUM | INFORMATION | EDITOR'S NOTE

EXHIBITION REVIEW 展覧会報告

「北海道・港町浪漫」あれこれ

去る1月から3月にかけて開催された「北海道・港町浪漫 函館・小樽・釧路ーロマンと抒情の風景」は、北海道における三大港町を題材にした油絵、版画、立体作品を展示し、多くの観覧者で賑わいました。古くから船や新しい商品、人が往来した港町には、独特の郷愁とロマンティシズムが漂い、特に函館に住み、港を見ながら暮らしてきた方々には身近で親しみやすい世界と映ったようです。この展覧会のオープンに際し、1月13日には館長・青野昌勝による「いい風景　いい出会いーもうひとつの港町・室蘭にて」と題した講演会を開催し、室蘭を舞台に画家や美術について話してもらいました。そうした講演会や展覧会に出品された作品群を見ながら、港を中心に出来た街とその他の地域の美術文化との違いにふと気がつくものがありました。つまり、一言で言えば、港町では抽象的な事象よりもより生活実感に近いものが好まれ、そこに漂う独自のロマンも「生活必需品」として育ったものなのではないだろうか、という感じをもったのです。

例えば小樽には、美術界全体の流れに反して愚

田辺 三重松「夏の港町」1937年

直なまでの具象画の歴史があります。運河を中心とした小樽風景や、プロレタリア運動から生まれた労働者の群像を、他の魅力的な流行の主題にわき目も振らずに描き続けてきた背景には、描くことによって自らの姿と環境を捉え直さざるを得ない切実さがうかがえます。芸術を生きる手立てとして使用してきた切実さは、抜きさしがたいロマンティシズムやノスタルジーとなって作品に流れ、画家と鑑賞者をつなぐ掛け橋になっているのです。

函館は、西洋文化がいち早く流れ込んできた街です。日本の街である函館が西洋文化を内面化してきた過程は、そのまま日本の油彩画の歴史と重なります。西洋に圧倒的な歴史的蓄積をもつ油絵具を使って日本人の心性に見合う表現を獲得していくことには、明治から昭和の初期にかけての長い苦渋の歴史がありました。単に学びの対象でしかなかった油彩画から、南画的な心情の表現を参考にしつつ所謂「日本的フォーヴィズム」を生み出し、自らを表現する言語として確立していく。安井曾太郎や梅原龍三郎が中心となって牽引したそうした動向の一翼を担ったのが函館出身の田辺三重松ですが、その風景画には、確かに港町函館の二面性とともに油彩画という媒体の二面性がよくあらわれています。その二面性を調停する場として油彩画を選ぶことはまた、自らの中にある西洋と日本を調停していくことにもつながっていたのであろうと思います。つまり、田辺にとっては描くことは生きることにも匹敵する必要不可欠なことだったのだしょう。作品に流れる抒情はその過程の副産物でありながら、それ自体が絵画の生命線でもあり、私たち観覧者にさまざまなものを喚起させてくれます。

港町の絵画にロマンがあるとしたなら、それは画家自身の街を見る目にロマンが宿っていたからに違いありません。「北海道・港町浪漫」は、画家が油絵の可能性をリアルに信じていたことが、観覧者にもそのまま伝わった幸福な展覧会だったという気がします。

（学芸員・穂積利明）

伊藤 正「運河に沿う街」1962年

EDUCATIONAL PROGRUM PEPORT 事業の報告

冬のワークショップ・21世紀の初体験だ!ろうけつ染めの書

好きな文字を書いた、色とりどりのカレンダー完成!

あいにくの吹雪にみまわれた1月11日（木）。雪で真っ白になった子供たちが、元気に美術館に集まってきた。今回は小学1〜6年生19名が参加。保護者の参観もあって、講堂は熱気にあふれた。

まずは展示室で美術鑑賞。鷗亭記念室では小さな書作品を見る。このあと筆を持つことになる子供たちの目は真剣。難しい漢字に首をかしげたり、「この字読めるよ」と声をはずませたり。特別展示室では「北海道・港町浪漫」をじっくり堪能し、いよいよ活動開始。講師の米谷広子先生（遺愛女子高等学校非常勤講師）は、初めに「守」と書いた3枚の紙を並べ、書き方によって違った印象に見えることを説明。子供たちは用意した言葉を半紙に墨で書いてみる。「へび年」「新世紀」「ゆめ」など書き初めらしい文字が並ぶ。次に先生は溶かしたロウで文字を書き、その紙全体に染料を刷毛で塗る。これを新聞紙にはさんでアイロンをかけ、カレンダーに貼り込めば出来上がり。

緊張しながらも堂々と書き上げ、それぞれの工程をこなした子供たちは満足顔。「みんな自発的に活動していました。最後に作品発表をしたかったですね」と米谷先生。準備も含め、本当にお疲れ様でした。21世紀の最初の1年をかざるカレンダーの文字は、きっとみなさんの家の中で輝いていることでしょう。

（学芸員・萩原千鶴子）

ESSAY ON MUSEUM

美術館員のひとりごと

見えること、見えないこと“美術館の楽しさ、難しさ”

館長・青野昌勝（あおのまさかつ）

函館美術館は、今年がちょうど開館15周年に当たり、21世紀の幕開けと重なって、二重の節目を迎えたことになります。そうしたタイミングで、また一つの新しい実践がこの「はこびニュース」というˮ 目に見える形 ”で生まれたことは、特記すべきことであり、とても嬉しいことです。

「函美」からニュースを運び・お届けするという願いを込めた「HAKOBI NEWS」ですが、単に、当館から一方的に運び出すだけではなく、今後いろいろな方々と双方向で情報交流できる生きた媒体として進化させていくようにしたいものです。

“ 目に見える形 ”を強調しましたが、美術館には数多くの見える（見えやすい）部分と、それ以上に実に多種多様な見えない（見えにくい）部分とがあって、美術館の楽しさ、難しさを考える時、この一点に相当の課題が集約されているように思うからです。

例えば、美術館が取り組む様々な活動、特に特別展のような展覧会事業は、学芸員等のスペシャリストが2、3年から数年先を見通しながら長い歳月を費やして継続的に調査研究（海外事情については、それぞれが毎年のように私費を投じて研鑽）し、館の基本方針や様々な構想の下に、温められ集積された成果を、分野・内容を質・量などの面から厳選・検討して、目に見える状態に組み立てて初めて公開にこぎつけているといえるでしょう。しかし、これも展示してお見せする側から言えば、いわゆる氷山の一角に過ぎないものといえなくもありません。“ 見えやすい ”といえば、入館者数はその最たるものかもしれません。それだけに、増減の結果や低迷傾向にある状況などをもって、その切り口だけから美術館活動全体の評価を下されることがあるとすれば、まことに残念で辛いことです。

ともあれ、両面のバランスに配慮し、地味ながら着実に底力を養うことをおろそかにしてはならないと考えているのですが…。

ART HISTORY

道南の美術外伝 1

謎の贋作絵師？鐙谷抱圓（あぶみやほういん）

「道南の美術外伝」は、およそ200年の歴史をもつ道南の美術から、これまで展覧会では取り上げられなかった画家やその作品、知られざるエピソードなどを、時に現存作家のインタヴューなども交えながら紹介していくセクションです。今回は、横山大観の贋作をつくったのではないかという嫌疑によって悲劇の運命をたどったとされる日本画家、鐙谷抱圓（あぶみやほういん）について紹介します。

日本画家・鐙谷抱圓の経歴には謎が多い。そのために、美術館や本格的展覧会などでは今まで表立って取り上げられてこなかった。

明治13（1880）年8月21日、熊石町の字掛間（現・字雲石六番地）に銀之助の長男として生まれた鐙谷抱圓は、本名を勝三郎といった。雅号としては抱圓のほかに、勝彦、廣定、大節、芳圓などを名のった。明治20（1887）年、雲石小学校初等科を卒業後画業を志して上京し、翌年に横山大観の門に入ったことになっている。が、当時の大観はまだ創立されたばかりの東京美術学校に入るために自らが結城正明に就いて習練を積み重ねていた頃であったから、実際の入門はずっと後のことであろう。大観の門に加わったとするなら、少なくとも五浦に日本美術院を創立した明治35（1902）年以後のことだと思われる。

鐙谷抱圓「人魚」個人蔵

入門後、抱圓は順調に画歴を重ね、歴史画、風俗画、人物画などに腕をふるう。妙選寺のために大作を描いたという記録もある。しかし、昭和10年代初頭、大観の落款を自らの作品に無断使用したかどで、破門同然のかたちで門を追われる。独立を余儀なくされるが、東京や九州地方などをめぐったのちに、昭和13（1938）年、最終的に故郷熊石に落ち着いた。真偽のほどは不明だが、落款使用は別人の策であり、もともと大観とそりのあわなかった抱圓にかけられた冤罪であったとする説も伝わっている。

抱圓の作品は、昭和15（1940）年頃ほぼ4か月に渡って滞在揮毫した小樽の銀鱗荘に襖絵や欄干として残されているほか、北檜山町、函館市、また特に熊石町内に残されている。中でも抱圓の作風をよく反映している《高砂》は、能や謡曲としても伝わる播州高砂の松の逸話を絵画化したものである。とりわけ江戸時代に徳川家に重じられた主題であることから、狩野派が頻繁に取り上げた。高砂と住江の場所を隔てても通い合う相性の松を翁と媼の姿に仮託し、夫婦愛や長寿の喜び、繁栄への願いを象徴してきたこの画題を、優美で柔らかな線描と穏やかな色彩のうちに抱圓は描いている。

作風としては、師であった大観よりもアルチザン寺崎廣業の方に近く、狩野派の画風と技法を丹念に学び身につけたと見られる。樹木や葉の表現には初期の日本美術院が得意とした朦朧体を巧みに取り入れている部分もあり、確かに大観作として通るほどの高い腕の持ち主であったことは間違いない。

すなわち、鐙谷抱圓は、その技量の高さに反して生涯中央で評価されることがなく、田舎絵師として無念さとともに埋没していった悲劇の日本画家であった、と言えるのである。北海道内に作品を数々残したものの、名を知られることなく、晩年は札幌の子息宅に身を寄せ、昭和37（1962）年に同地で没している。

鐙谷抱圓「高砂」個人蔵

とはいえ、経歴にはいささかの疑問点もある。大きな展覧会としては、「帝国展覧会」に《元録花見踊り》が初入選したことになっているが、該当すると思われる帝国美術院展の記録には鐙谷抱圓という名前、もしくは他の雅号も全く見当たらない。また、当時は派閥を越えて出品協力する例が多かったとは言え、大観の門下にいた者が在野の再興院展ではなく対抗する帝展に出品し、それが伝わる唯一の大きな展覧会歴だというのはいささか奇異にも聞こえよう。

いずれにしても、その優美な画風の見直しとともに、今後一層の調査が必要な画家であることは間違いない。

（学芸員・穂積利明）

※写真提供：熊石町教育委員会

HAKOBI NEWS VOL.1

INFORMATION 4月―7月の事業のごあんない

特別展

■さよなら20世紀
―カメラがとらえた日本の100年
4月15日(日)～5月27日(日)
1901年から2000年までに撮影された日本のドキュメンタリー写真を通観し、私たちにとって20世紀がどういう時代であったのかを見つめ直します。

「力道山対ルー・テーズ」1957(昭和32)年
東京富士美術館所蔵

■日本の美とこころ
―桃山から近代・絢爛たる500年の粋
6月5日(火)～7月22日(日)
東京富士美術館の所蔵品から、狩野派や琳派、土佐派などの絵画や浮世絵、硯箱、陶磁器や書、武具など約70点を厳選し紹介します。<フロントページ参照>

シルヴァーノ・ローディ・コレクション
■イタリア静物画展
7月29日(日)～9月9日(日)
イタリア静物画の確立期から現代まで約400年の変遷を、伝カラヴァッジョ、デ・キリコ、モランディ、クレメンテなどの巨匠の作品によってたどります。

ミンモ・ロレッタ「オレンジ」

MUSEUM COLLECTION

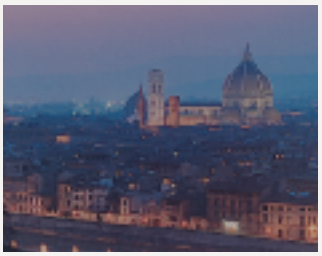
■SPRING
4月15日(日)～7月22日(日)
【常設展示室】
・新収蔵品展
―ひとの形象・自然の形象
平成12年度、新たに収蔵した箱根寿保、三箇三郎の油絵を中心に、人や自然といったモチーフを抽象化してその深奥に迫った作品を紹介します。
【鷗亭記念室】
・書家とことば
明治から平成までの歴史に名を残す書家たちの作品と書論を顧みながら、それぞれの「書とは何か」を探ります。

■SUMMER
7月29日(日)～11月11日(日)
【常設展示室】
・田辺三重松の色彩
―空の青・大地の黄
カラリストと呼ばれるほど色遣いの印象的な田辺三重松の作品から、特に青と黄に注目して紹介します。
【鷗亭記念室】
・清朝の絵画
清朝で興った書の考古学的発見と、それが日本書道に与えた影響を見ていきます。

EVENT

■「さよなら20世紀」美術講演会
「日本写真史 20世紀」
日時:4月15日(日) PM2:00～
講師:飯沢耕太郎氏(写真評論家)
会場:当館講堂 <聴講無料>

◆美術映画会Ⅰ
「マルチェロ・マストロヤンニのフィレンツェ・ルネサンス」
日本におけるイタリア2001年に賛同しマルチェロ・マストロヤンニがルネサンス美術を解説していく映画を毎月上映します。


■4月21日(土)「奇跡の町の誕生」
■5月19日(土)
「愛と陰謀 メディチ家の興亡」
■6月23日(土)
「引き裂かれた魂 ミケランジェロ伝説」
■7月21日(土)「ヴィーナスの誕生～ボッティチェリ・美の殉教者」
各回PM2:00～
会場:当館講堂 <入場無料>

◆アート・ドキュメンタリー・セレクションⅣ
シネマの向こう側
この春公開の「アメリカン・サイコ」の原作者エリス、先頃公開された「ダンサー・イン・ザ・ダーク」の主役ビョーク、1999年の話題作「アイズ・ワイド・シャット」の音楽提供リゲティ。話題の映画に関わったアーティストのドキュメンタリーを3日連続で上映します。

■5月3日(木)
「ブレット・イーストン・エリス」
■5月4日(金)「ビョーク」
■5月5日(土)「ジョルジ・リゲティ」
各日PM2:00～
会場:当館講堂 <入場無料>

■「さよなら20世紀」特別展セミナー
「芸術としての写真」
日時:5月12日(土) PM2:00～
講師:当館学芸員・穂積利明
会場:当館講堂 <聴講無料>

■「日本の美とこころ」美術講演会
「富士美術館のコレクション」
日時:6月9日(土) PM2:00～
講師:百田篤弘氏
(東京富士美術館学芸副部長・文学博士)
会場:当館講堂 <聴講無料>
＊詳しくは展覧会チラシをご参照ください。

★ミュージアム・コンサート
「日本の美とこころ」に関連して和楽器である箏とヴァイオリンの類いまれなアンサンブルをお楽しみいただきます。
日時:6月16日(土) PM2:00～
会場:当館ホール
＊入場無料ですが整理券が必要です。
整理券は当日午前10時より当館受付にて配付します。

■「日本の美とこころ」特別展セミナー
「華麗なる近代美術の魅力」
日時:6月30日(土) PM2:00～
講師:当館学芸員・萩原千鶴子
会場:当館講堂 <聴講無料>

■「イタリア静物画」美術講演会
「静物画の誕生とその意味」(仮)
日時:7月29日(土) PM2:00～
会場:当館講堂 <聴講無料>

美術館からのお知らせ

祝日開館について
2001年度からすべての祝日が開館となりました。定期休館日の月曜日も祝日と重なる場合は開館します。また、それにともない振替休館日を別に設ける場合がありますので、年間カレンダーにてお確かめの上ご来館いただきますようお願いします。

ボランティアからのお知らせ

新しい絵葉書セットができました。(売店部)
好評の田辺三重松の絵葉書を10枚セットにした新しい商品ができました。1セット500円で4月から売店にて販売しています。

ただいま研修中!(資料部)
3月の末に公募によりあたらしい仲間が増えました。ただいま新聞整理・カード化の実地研修や学芸員による講義などにいそしんでいます。覚えることが多く大変ですが、地域に貢献する喜びとともに頑張っています。

EDITOR'S NOTE 編集後記

永年の懸案であった館報がようやく「HAKOBI☆NEWS」というかたちで出来上がりました。ネーミングには、道立函館美術館の略称である「ハコビ」のニューズレターであるという意味とともに、来館者にアップ・トゥ・デイトに情報を「運び」たい、お届けしたいという願いがこめられています。従来の「博物館だより」のような官報スタイルから脱却し、フリーペーパー風に来館者と美術館の掛け橋になるような館報をと思いつつ制作にあたりました。皆様の要望に紙面で応えていきたいと思いますので、どしどし意見やご要望をお寄せください。(TH)

開館時間 午前10時～午後5時(入場は4時30分まで)
休館日 月曜日(祝日と重なる場合は開館)／祝日開館に伴う振替日／年末年始／展示替期間
観覧料
常設展観覧料

	一般	大学生
個人	100	60
団体	80	40

＊団体は10人以上です
特別展観覧料 展覧会によって異なります。詳しくはチラシをご覧ください。
観覧料の免除 児童・老人福祉施設に入所・通園の方とその引率者、身体障害者手帳・減免対象者証明書等の交付を受けている方、生活保護を受けている方及び65歳以上の方は、常設展及び所蔵品展を無料でご覧いただけます。

交通案内
バス
市営バス
五稜郭公園入口下車 徒歩3分
函館バス
五稜郭公園入口下車 徒歩3分
五稜郭電停前下車 徒歩7分
市電
市電五稜郭公園前下車 徒歩7分
タクシー
JR函館駅より 約10分
函館空港より 約20分
※当館ご利用の方は駐車場料金が2時間まで無料になります。

北海道立函館美術館
HAKODATEMUSEUM OF ART,HOKKAIDO
〒040-0001 函館市五稜郭町37-6 [TEL]0138-56-6311
37-6 Goryokaku,Hakodate,040-0001,JAPAN